丈斧句集

中村俊定文庫
文庫 18
494
2

志ゆきまを作る
梅んしまめ宮

古友

丈草俗姓は内藤にして世々尾張の国犬山
の城主に武を以て仕ゆ文を右にし和
漢の才あり若きより佛乗に帰して玉堂
和尚の禅意をつたへ家名を辞して薙髪す
僧となる蕉屋一鉢半化俳諧縦自由
せ蔵嚴惶迦備に追尋清雨入林之
蔵白濃風子きゆるを云北由よりゆゑに縁ふ
ありをまりて湖南北粟津龍ヶ岡に茅
庵をむすび佛幻庵と号し芭蕉翁を崩
祖とせちうくすてそれ故あり家墨のもとふ

第五滅後山之義りて法華乃報せんとあこ
一石一字の法華経を書写して墳ゑ築く
元禄十七年五月廿四日庵床を生
作を惜き能ゝ器乃東林の中ゑ埋ム秀
寒ゑ少ゝ寺法

早稲田図書

丈艾農白集

春

うゑひきや若木梅乃移身哉
世笑戸のあふちぶつや梅花
家孫き梅さくこのさう育菓孫
待こと梅ゑ咲るも菓待ゑ木

東鈴

梅うゝや湯立の跡北岸の切

中村孝也文庫

行燈杭の梅ちらきらり烟出し

遠色うす新春を賀す

水仙よ化すを焦す梅の雪

尾張の国よりを探りて

うゑ花ちり初ふり殘遅風

芭蕉翁の性芳を思ふ

梅の香に春ゆ道ぬ知すぐれ

引よせてちるひさる柳う南

我ゐと　鶏の逃し犯芹蕨

きらけを立ゝ土用ゝ寒を思ふ

きひらうちんを気興ちきや

きらけをちのこさあや花ゝ

皆ゝ中ゝさとのうゝ田鶴の

里北男の田塚のを水蔵と

泥ゝちゝ屋れハ腰をもさる

鮫乃いとゝもゝ入こりて

入磬ゝ　鶏ゝ死ゝ田ゝ

瓦つゝめんてうゝ　蛙ゝ鶏

梅ゝ青ゝ遅ゝて

杭　飛をゝちこゝて中　蛙ゝ南

中菴

火をうてもあるよ帰るあの雨のへる
のゝ猫やうゝ花行かと杉孤牛
帰る雲ちゝくてや夜おのやうあ所
芋掘て焼芋雀よりく煙れ
鶏うゝよ向しひとうう孤松の雲

与考餞別

杉風の雲やも雀の蓑おれ
燕の雁よ向てや雪ちゝう
芦文よ別ゝうゝ雪

蕉付孤ゝ花ぬやうまもや風中
大原や蝶の出てまふ孤身
陽光よ清孤蕉さへまゝよう
芭蕉翁乃墳ゝまふて我蕉身
をおふ
かゝろふや蕉ゝうゝ仮ゝうう
雪雨や伊ゝのゝん雪除戻り
ゝうゝ光や山ゝ孤蕉の花
方を孤雪ゝおろめ雪ゝ仝ゝ
さゝ孤ゝ雪ゝ一ゝ孤孤ゝ蕉

てる人に枕乃ありかを蝶ふのみ
雅なる自由ちり進み程なく
是を戯れ出せきしに先人も
一郷なるの老を持る人ちりとも
世まで旅へとて此上の茅庵に
訪れ来る松を傍ら春ある山村の明
夢に枕にいたる木の葉しきる
俄て鉄漿空さも一入なりこそと
後尼返る波子のそよぎ
木枕の垢や伊吹に残る雪

閑居

秋夕に世の出来や事なし
白妙に身を鳥や花の実
先笠の枝ちりんちりさら
角入れて人をしらや念の為
家に創設の郷を借りし洪して
磯なみ先の花はうつろひけり
うらくと来て花見の閑居かな
春は韓の影て入水や山桜
花見より田鍬のあとや水は底

死さとも第さとも老れ古庵の花
墻梅のこの庵よ主よ家多足れ
花ちるや敲あけさる岩扉穴
水壺よくつるや花乃人出入
片屋根も黒みこの手しら花むしろ
ちりのこさも老貧みこそ松ゆ濃の色
木蔭や柘榴本きさのき花扉牛
笠梅干舞もちろ〳〵花の友
小夜乃失雑ぬけてや色雲下
海赤の花

蔦くむや花足扉牛乃夕より集

病中

山のうち花人もうや扉もさ
夕べ〳〵や色の俗こきあつてこ

餞別

天遠り扉先よ主うつくし
笑主ゝ紫のあぬや鄰鴉山
さし祝く宝へつゝ扉日主この雷
あゝうく岩う下や藤の花

畫賛

何ぞ葉の影を孫もむく雉子の
子自や多孔雀色ぬ素一本
子自庵
物如問き星もかしも事の持

夏

時多帰や淑水乃さ濯り
庵ゑさやく ろ都孔をとっきを
ろ親瀧ろ上のろろ

川越乃俊中ろを や 郭ろ
ゆ少ゝき さを誰よやさん川むゑ
時如百よ事一を以孔時多
葉経ろ 焚や秋風のろ想
杜鵑すくや板も 掛さめら
ろへゝ事山詩もを よ 杜 ゆ
山 道や 垂事よひく時鳥
嘲嘲ろて
蕉 追の 座入るや 蕉乃 杜鵑
本雪川孔おろて

ちの花木や篝火の上に花ぬ俳

月夜のけいこ

花丸のけいこに出て

遊ぶ命寺

第に鶯を時出せ　鄭子

森て行や梅田批把書蜀葵

蜀の梅乃麦や稚子出て夕ゆ影

杉ちりよやちりぬ田植この丸

谷風や書田を廻る庵の家

杉風を出る青田の戦きの家

夕ぐれや茂るよりる川に臨

寺来ぬ俳舎すて

芽出しまつこ葉に茂る柿の実

ちり絹瓶蛇のり来や　杜若

書こやちる鍬やもむる壺の枝ふ

魚鐘や寺に仏をよく山つるひ

ふよ花て落る書こやを家に仏

草葉を出ぬかゝ家に初言花

もしまるむ蛍の中や谷の水

螢火や魚に仏あるせ庭のへり

豊後龍門寺にて

罷出や村中に取る熊にて

曲がにて子を悼

[illegible]寿を殺てかなしかりし

やうしを出て嘆かるる人に答

仏木の里書懐

北にの書乃石や此鈴の孫にて園

血を分しまたを行ものを教ふ

彩日さまを多情のうちや牧にて迷ひ

素痴俳人

[illegible]

門先よりの入り牧にてうち

夢丸制製せし時金鮮

牧帳を出て又俳句あり友にて月

俳句にかへ釜の出てゆく耳の定

畫にさまをひ出してや出しうち出

梅ちるを帰るを事

蟬蜂やかれて上彩の山

久立にうしろ入る猫ふ系

義僕の園まで

町中の山やを月乃上り事

白雨よりとをりかけて佛殿の議

夕立の雲のくれゆくまつの色

涼しさに誘はれ岩のあなたより

小屋風の山里すゝし脇坂上

あり礎や松ゆゑ宮を蛙くれまゝ

つゝ立寺ぬしの袖や涼ふる

宮殿乃根ぬけや漢の豆まき

きゝしさ拂ひもとなしつゝ

丈山乃像

さゝの様に高を寫して形まゝし

丈山よりて市中苦熱

涼しさを見せてやうこく佛松

ぬ市果しゝ池水桂の月

西樹庵乃池涼

手水よりめこぼまゝうや梅花中

清笠に夏合せ市り蓮の露

浦舟北頭屋しゝ匂ふ蓮の氣

雁鉢行時送りて

老ちゝ歩行祇つくうり笠

雨もの雨音ともうる着ぶ

之素法師分きうの春よ
世世中を捨しよりは園扉の書
桐行
帷子のあらやまりまり日北出る孔
梅本を立出るとて
雨ふる先立ちや玉姫孔笠

秋

秋夕遠秋の色や京の雲

秋明すて雨降中や こつかし
精靈北をうれしく人をあつ色分
靈棚の傳ありまや山の上
意柳や藪木をもる〳〵身北新
精靈も出てこうの世の桐葉小
舞里ゑ帰りて
精靈にもりあそせつ十年前
送り火北山ゑ上るや京北街
稲妻北ゆれて高るや山のうへ
夜舟ゑ上りて酒を喜ぶ時分

いちつはや秋ゆて後も舟こぐ
海ふく人は心きれやきりくす
り燈に心や袖のぬりくす
言はてや戸みうしろ鐘撞
踊るの入へり来ぬ夜や蓑
笠ぬと元まも等ききもしれ
まりくま峠や出立北鶏の下
面うて森ち北の涙のまりくを
森くり北方るもむや蟬蜂
つれのあ所に入へ掃そぬりくり

病床

玉北寺の中ゝ咲出を寝ぬ
影木乃入おちり乃ぬ蓑北松
文七伝義ゝ文通北奥に
中ゝけとも咲ゝう毎重也を侍原
山とるやゝりつき鳥北こ
ゆけうにちひて死る秋乃鶯

旅中

婚姻北ちを縁とる笠の中
峠とれ月さしまとし庵北形

小倉峠ヤ所をうちこせば庵の孝
行なる老を思ひうつる花 秋うち
果給の名ヤ雁鳴くらく庵乃毋
君身ヤ雨あるより あふ孔光
名身せ 車きくらす辻書瓦
辻老ヶ翁さてこも 身夜ふれ
戸を明て自れをくらや芝ヶ上
ゆく 樹を漏よあてり月の面
壁山ヶ夕つうて豆ゝ身乃あ
京 菜 蕊 ち自れ身ふ傾仲可

淀川の遠ゝ
舟引れ道ゝ岸ヶ身乃ふれ
麦白してヤ苗ヶ乃ふ孔身
鶯白ゝ林を鳴くいけ乃ふ孔果の舟
ちしをて生ヶ白れよ
友ゝ孔の舟よ庵 分ヶ義雪少
答見せあ山 菴
焼衆も居ヶ ゆく夜 ゆくの孔
痴人と鏡ヶ未よ庵ふ義雪ふ
海乃後 ゆゝ宅より孔ヶ入ふ
花ヶも出ヶ 孔 芋をうふ乃

鶏頭に蓮を植て笠の縁
鶏冠乃高をうつすや ゆり花
乃柿や 庫裏よるふ夕り影
木つゝふ定態出来 熟柿小
唐柿金さゝ小ゝろ
湯柿を かゝ孔 うゝ孔よ的尾茂
谷こしよ 時るの孫や 京孔中
居風呂の下や 栗山乃方の 郷
傳 のけし 庵孔 時や 糸孔 竹葉
時時 ふて

竹伐乃和 ゝを見へを 蘭の
芦の穂や 秋 柿上糸 蓋 うゝ
あ し 孔 穂や 蓋を ゆゝて 打もゝ
早咲の 時を 橋 孔 お 葉 雨
稲穂よ 出来 あ る し や 秋の 雨
松の 葉 孔 地 よ 立ち 蚊 秋 孔 雨
祢ゝ ゝ ゝ 穂 を ゝ て 来 や 蓋 の 蓋
伊賀へ ゝを 蛙 孔 紀 常 ゝて
いゝ 松 ゝ を 蛙 孔 紀 常 ゝて
何 猿 も 秋 孔 時 孔 和 も 秋 孔 雲
秋 ゝ ゝ ゝ ゝ 山 孔 ゝ へ

旅寐とゝろよるぬる秋の比
書かやをさしもあるを焼ける
帰り来る魚のまこのや冴れ簗
重陽の新菊書き出る囊うれ
秋雨ふるさとかりて出て山
須磨乃浦
海士の秋のあてとや寄る船
り船や捨よう海龍屑
行船乃四方より踏る磯の南

富士しかをうれ地乃和うれ
一方を霧ふるつふ村雨うる
ふをり仲の村雨の行変
業人うしうれうけぬく影田ふ搭
鳥のはもさをうををしうれは
函根菩の海をぬりむく村雨うれ
鍋もをしかさくり影や村うれ
鬼をや村雨をうる比吉れまて

赤松あらう孔雀を出して

むれ〳〵てみやゝ樹雨孔うう青梅

越中高岡にて

八月や対面うる雨孔雀光

出山孔しうれつきあふ庵の上

所思

ものれうる 拉も孤子孤しうれ

芭蕉翁庵中祈願の句

峠こそ野のきりぎりやもろきやひ

ろ城翁の庵庵より借りて

うつくしき葉の下孔 高さ五寸

後二師孔孤栗

曉の墓も ゆるくやゆ多嶋寿

芭蕉翁追悼

ゆりさそふ孔 寺孔俳也墳の前

色蕉翁のちるくもうつり秤

春さ毛多高ょ偶居ミてんせく

ものれる玄ま〻許〳〵ゆ送る

数雪や葉湯の後乃ミまり鍋

玉しくの墓所も同し蕉翁の墓

去るこゝ孔雀を殺ちぬ弟に
湖上乃木曾書そ孔すさき
為伐ねるゝくしのぬうつきる
油の洞も一しち孔明面をまく
もゝ舊寺乃夕アラ鈴をうけて
梵逸吟席のつとゝねもろく
殺つも世袖をひとり残ち有る
方ちゝ八おそく孔を宿せんるま
ゝもそあるゝ近き谷川乃小石
うきあつゝゝる蓮経の函を浮

そ孔菩提を引りその悲砂
謝をんゝるを頼くゝ沐よゝ東の
象とのゝ聲くゝ裏のゝまりに
筆を投うちちゝを孔ゝて生く
墓前の拾孔をゝ原のく
石孔孔墓を法々初しゝ孔
芭蕉翁七回忌追福孔州法華
経写の前書あり
移うけ守経、のく風の蕉葉小
水底の岩ゝ高つくゝ孔宗紀

風乃あらし雲やこ如柳
赤ら孤立梅蕉翁乃
こうしの子を伴ふ母と似るなるべし
句を夢見てそ孤翁の像を出て
賛望らる平
木ゝし孤身を粧うろ岩の牛
老この人形岩のあれや窓のうち
山中泊
雲如る宿孤走り平筆孤雲着
ちつ雲の泥みゝれつ夕の色

里ゝを孤雲見や比叡の前うしろ
雲乃序隅さひし牛孤留を
孤孤寿そ孤ちり雲のうれ
如里ゝ孤雲おれや岩孤雲れて
如りて山うゝ見ゝし雲の窓
孤ちく雲孤屋間や雲暮り
地も山も雲ゝ雲ゝれて如ちゆ
さうすくや如つむ峰の雲孤雲
おれあふて中行意や雲の友

都の人かゝ出しる

山雲はあまりとやまと　京の雲

嶺嵐の聖明寺にて

柴折戸やゝ我を雪折

ちまゝ庵を訪ひ事ぶ

別るとて

食事うの角の上を　帰鳥うれ

村雨乃岩を出るや　嶺の根

ちまぬまる雲の黒をや　雲北間

淋しさの底ぬけて降みぞれ雨

皆戸に北ゝ上ふる鳥ゝ

さゝなる夕　庚申待乃舟形

山底をこえて来る影の小船少

我うすきそやしをゝ船のむれ

雲後北　春覚しや鶴北寿

猶の火や　嶺うゝ乃五六尺

夕庵の火燒の下や　古狸

下京を白雪や燒　祢飾うゝ

かゝくと　鶏日さしの火燒ゝ京

守り居る中焼を菴の中窓の香

吹嵐おろしや今を山や松ふ

り晩の病気ちりをとゝ通して

山やおろ多姿の中北夏中焼

嵐夏や傳の人ゝ焚よ行

残る者てよれえ火焼のえゝ炭

賀交

ましをを残子の切を張りゝ

一夜さよ猫ゝ多るもやけ中れ

屋森さへうらぬ物ゝ多れえ

主別るゝ皆北跡もさこそと思て

蹴ヤ始る船ヤ船の元ヤ夏土蓑

結北庇見つゝ和ゝこゝり

三つゝさと為珠も思えて祖代ヤ

毎器ゝ新形ヤ鉄ヤ

一月をヤ松ゝ笑ゝ世ゝ生ゝ地

ゝゝ門乃仲にひゝくヤ鈴敲

古嵯和ヤ世淀鳥撰集の河

白撰ヤゝゝれ俳夜のゝ風

水風ゝゝ筆ゝゝ谷の巣

鷲北風の強吹居はべりしの面
神移りさえこもれる如神宮の夏
黒潮岩を穿海岩をうがつ岩
間より傳つ落る雪北日の照る
花と咲物とそちかりとそ活化
より恵化しまとりつ所
海苔の名や岩にうちつかるる雪と墨
雪ぬ搗北うけ出る新や名の通
雪ぬりも高し白鷺の名北自
獨清潔中に北を色しまて

燈掃十山風うけて吹通し
寒き暁堅北日ぬ的て風葉
鉢高に悠然ぬ
十五日夢やのしこも年北雪
行燈を清せと嵐乃吹き志
遥き山へ帰るる鳥の如

安政三年午六月　翠樹堂

蓬門俚諺書林

井筒屋庄兵衛

橋屋次兵衛

板行

文政十一年生二日取之

詩稿表

吉茂